

蓮長破門さる

「……斯くの如く法華経は釈尊が自ら仏説中の極説也と言われておりますが、何故この經典が現在まで弘まらなかつたかを御一同は不思議に思うであります。それには次の如き理由があるのでございます。三世を見通すのが仏様であります。されば釈尊は御自分の滅後の時代がどう変遷してゆくかを、とくと御存知でありました。正法千年、像法千年、末法万年とみられたのが、釈尊の滅後における時代観でありました。正法の時代には小乗の教が行われ、像法の時代には権大乘の教法が流布する、最後の末法の時代には、実大乘のみ行われる。これが釈尊の遺訓であり、又教法流布の順序次第であります。しかるに今は末法に入つて二百二年であります。従つて小乗の教や権大乘の教はその利益を失つて、実大乘のみ流布する時であります。実大乘とはそも如何なる教を言うか、勿論法華経であります。釈尊滅後の仏教の大学匠である南岳大師、天台大師、伝教大師も、この教法流布の次第を充分に御承知でありましたのでわが身が末法の時代に生まれなかつたことを歎かれるとともに、この末法の時代を甚だ恋しく思われておつたのであり

ます。天台大師が遠霽妙道と言われたその妙道とは、実大乘たる法華經の流布を言われたのであり、伝教大師が末法甚だ近きにありと言われたりは、法華經の流布すべき末法の始めを恋慕されてのお言葉であります。

法華經の譬喩品には「若し人信ぜずしてこの經を毀誇せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん、その人命終して阿鼻獄に入らん」と、はつきりありますが、この經文をもって世相をみるならばまさに皆墮地獄の教のみであります。

即ち、法然上人は弥陀の三部經を唯一無上の教えとして他の經文をなげ捨てよ、ほうり出せよとさえ断言せられております。榮西禪師が教外別伝を口にしてこの法華經を毀誇すれば、弘法大師は法華經をもって仏の戯れの言葉としてこれを輕侮せられておるのであります。

しかしながら、諸仏菩薩は何を修行し、何の力によつて成仏せられたかと申しますならば、皆なその過去において法華經を修行し、法華經の功德によつて仏となり菩薩となられたのであります。

故に、阿弥陀仏の活動力も大日如来のはたらきも、觀世音菩薩の救済力も、一切諸仏諸經諸菩薩の力と用とは、法華經の力であり、南無妙法蓮華經の力用であります。

この根本を忘却して、如何に各宗蘭菊の美を競うとも、ただただ人心を迷惑するのみであつて、成仏得道などは思いもよらぬことであります。

外世間を眺むれば、斯くの如く雑乱その極に達しておりますが、一度振り返って内を眺むれば如何でありましょうか。わが干光山清澄寺はもとこれ伝教大師の流れを汲んで、法華經を正意として創建せられたのであります。しかるに中頃世の弊に洩れず、慈覚大師の大日經をもつて法華經よりすぐれたりとなす邪法邪義に迷惑せられて、今や殆ど真言宗と申してもさしつかえない程の乱脈振りであります。

星は多けれども大海を照らさず、草は多けれども大内の桂とならず、念仏は多けれども、仏となるべき道ではありません。しかも東方の仏たる大日如来を安置して、その仏前に、西方有縁の弥陀の名号を唱える、一山の大衆もおそらくその心中に、この一大矛盾を不審となす方が、多々あるうと思うものであります。はからざりき蓮長十五か年の仏法研鑽の結果は、中興開基と言ひ伝えられるわが山の慈覚大師の邪法邪義を悉く捨て去って干光山清澄寺を創立の古に復し、伝教大師の精神を生かすとともに、諸經中王法華經最為第一の積尊の金言を如実に実行することでありました」

……この時である。

蓮長の講座近くに座っていた円智房は、つと講座の前に立ちふさがると、

「誰かと思えば善日鷹とんでもないことを吠えたておるわ」

蓮長の面上に、唾を吐きかけたかと思う程の冷罵を放ったのである。これに機を得た地頭の東

条左衛門尉景信、最前より日頃わが口唱する念仏を悪口されて、ぢりぢりして、身体をこゆるぎさせておったが、

「無礼なり、売僧っ！」

と憤然立上ると、刀に手をかけて、蓮長法師をはったと睨みつけた。景信の従者四、五名も主人の激叱とみてとると、ばらばらとこれも立上って、蓮長のがすまじの態勢をとって、講座近くに立ち進んだ。

静粛だった持仏堂の内部は忽ちに騒然となり、場内の聴者は皆な腰を浮き上らした。

「待たれい、待たれい」

蓮長法師の師匠たる道善御房のみが、座を崩さずして声を放った。

「ここは尊い霊所でございますぞ、血をもつて汚すなどとはもつての沙汰、お静かに……お静かに……蓮長つ座を下りて、座を……」

言いながらじいっと蓮長の眼をみつめた。悲痛な眼、師匠の意をその眼中に汲みとると、蓮長は一礼をして、静かに講座を下りて、悠然とこの場を去ったのである。

この蓮長の落着いた態度が却って、場内の奮激を爆発させる結果になった。

「蓮長を逃がすな」

「仏敵を葬むれ……」

且信徒までが口々にど鳴つて一勢に立ち上つたのである。

怒りの吐け口に究した景信の従者達は、蓮長を蹴倒すがごとき勢で、今まで蓮長が登っていた講座を足げりにして、踏みこわしてしまつたのである。

「やれやれつ……」

喊声が誰からともなく湧き上つて、正に喧々轟々たるものがあつた。

この騒ぎの中で、道善房をとりまいて、円智房、実成房等々塔中の住職は何事か言い争つておつたとみえたが、急に円智房が大声でど鳴つた。

「蓮長は破門したと、たつた今師匠の道善房が言われたぞ、よつて只今より蓮長はこの山の僧侶でもなんでもないぞ」

これを聞くと地頭の東条左衛門尉景信はにたりと笑つて、従者に耳打ちをするとこの場の騒ぎをよそにして、さつと場外へ身はずしたのである。続く従者は各々刀の柄をむんずとつかんで、ばらばらつと持仏堂を駆け出した。

この一瞬、さすがに場内は水を打った如くしずまつた。

